

Newsletter

2009 vol.3

2009年12月4日 発行
奈良教育大学 大学院
教育学研究科 教職開発専攻
〒630-8528 奈良市高畑町
TEL&FAX 0742-27-9354
<http://www.nara-edu.ac.jp>
発行 奈良教育大学 教職大学院広報係

目次

1. 学長からのメッセージ
2. 研究室だより
3. 学校実践Ⅲ・Ⅳを終えて
4. 研究発表会
5. 各種案内

1 学長からのメッセージ

教職大学院のパイオニアとして

国立大学法人 奈良教育大学長 長友 恒人

本学は教員養成系の単科大学として伝統と文化の香り高い古都奈良の地にあつて、一貫して、「教職に対する高い使命感と指導力を併せ持つ教員の養成」を目指し、多くの有能な教員を世に送り出してきました。

近年、社会の構造的な変化に伴つて、我が国の教育事情も大きく変化し、山積する教育問題への喫緊の対応が求められております。そのなかにあつて、教員養成の課題として、専門性と実践力に裏打ちされた教育力・指導力を教員の資質・能力としていかに高めるかが重要な課題になっています。

教員養成を担う本学としてこの課題に対応すべく、2008年（平成20年）4月、大学院教育学研究科 専門職学位課程 教職開発専攻（教職大学院、定員20名）を開設いたしました。現在、第1期生として23名、第2期生として21名の院生が高度な実践力を備えた教員を目指して活発に学び、研究に励んでいます。

本学の教職大学院の特色は、専門性と実践力を兼ね備えた教員の養成を目指して、院生自らが目標とする4つの教師像（計画者・授業者としての教師、教科の専門性に強い教師、カウンセラーとしての教師、リーダー・調整役としての教師）の中から一つを定め、本学独自のカリキュラム・フレームワークによって、高度専門職としての教員に求められる水準を明示した、アセスメント・ベースの教育課程を構築している点にあります。

教職大学院においては「理論と実践の往還」と称されるように、大学教員を媒介に大学と学校がよきパートナーとなつて、院生が、共同で学ぶという新たな実践知の共同体を形成して実践研究を深めております。また、連携協力校を核とする「学校実践」においては、院生が主体に大学教員とチームを組んで学校で実践研究を行う、という取り組みを実施しております。

研究面では、小規模大学でありながら、「学校問題ネットワーク構築による大学院教育」、「実習到達度を明確にした実践的指導と評価法」研究が文部科学省 GP に採択され、「理論と実践の往還」をどのように具体的に図っていくか、その方途を求めて研究を進めています。

院生の学びの原点は「学校」にあるといつてもいいでしょう。その中核を占める「学校実践」においては、教育委員会のご理解、ご支援を得て、県内の小・中学校が連携協力校となり、実習と共同研究を推進していただいております。今後とも、教育委員会や学校関係の方々の深いご理解とご支援を賜ればと思います。

本学教職大学院が日本の教職大学院のパイオニアである、という気概をもって、今後も「教職に対する高い使命感と指導力を併せ持つ教員の養成」に努めてまいります。



(1) 子どもたちの変化と発達援助

教職大学院准教授 粕谷 貴志



■子どもたちの変化と学校現場の現状

児童生徒理解や学級集団育成のサポートのために学校現場に

行くと、必ずと言って良いほど子どもたちの変化とそれに伴う指導の難しさの話を聞くようになりました。このごろ多くの学校が同じような難しさに直面しています。

この指導の困難さにつながる子どもたちの変化の背景には、社会の変化による「人とのかかわりの質と量」の変化があります。今の子どもたちの中には、人とのかかわりの中で身につけるべき集団や社会に適応していくスキル（技能）を学習・獲得できていないだけでなく、応答的で温かい人とのかかわりの中で発達させるべき肯定的な自分という感覚や他者とかわる安心感などをもてない子も増えています。

そして、このような子どもたちの割合が増加している学校で、不登校、いじめ、学級崩壊、学校の荒れなどの問題が頻発しています。

■変化に対応した教育実践

しかし、このような困難な現状の中でも、さまざまな問題に対処し、落ち着きを取り戻す学校が出てきています。グループ・アプローチといわれる「人間関係づくり」などの取組によって良好な児童生徒集団を育て、その豊かな人とのかかわりの中で発達を保障する実践をおこなっている学校です。問題を抱える児童生徒を個別に援助するだけでなく、集団の中ですべての児童生徒の発達を援助する取組がおこなわれ、学級崩壊、いじめ、不登校、問題行動等が改善されています。

困難な状況に直面しながらも、児童生徒のため



にと努力されている先生方によって、解決につながる優れた実践が生み出されています。少しでもそのような先生方の役に立つ知見を発信できればと願って研究をすすめています。

(2) “ライフキャリア” の視点から人間発達を支援する

教職大学院准教授 河崎 智恵



皆さん、はじめまして。教職大学院でキャリア教育を中心に担当しております、河崎智恵（かわさきともえ）です。

「いつも心に太陽を」をモットーに明るく歩んでおりますので、どうぞよろしくお願いたします。

さて、皆さんは“キャリア”という言葉の響きからどのようなことを想像されますか？一般的には、仕事や職業など、狭義で使用されることが多いのですが、広義では人の生きる道、生き方と捉えられます。現在のような不確実な時代においては、生き方の決定は簡単ではありません。児童・生徒のキャリア決定・キャリア発達を支援することは、教員にとって重要な仕事のひとつといえるでしょう。

振り返れば、私自身、教師としてこれらの課題に直面したことが、キャリア教育（進路指導）に関する研究の出発点となりました。そして、現在は「教師像3：カウンセラーとしての教師」のグループに所属し、教育学・心理学の側面から、様々な実践課題を院生の方々と一緒に検討しています。

また、生活を営む能力こそがキャリア発達の要と考え、「生活実践力の育成」を目指した教育研究（家庭科教育や消費者教育）にも取り組んでいます。「ワーク・ライフ・バランス」の視座からも生活力は不可欠であり、教科・領域を越えた取り組みが求められるでしょう。今後も“ライフキャリア”の視点から、共生的な「キャリア教育の実践」および「生活実践力の育成」に寄与できるよう、努力したいと思います。

教職大学院は、驚くほど多様な知的刺激に溢れています。また、実践からの帰納的な理論構築は、大変楽しいものです。ぜひ、皆さんとともに切磋琢磨できることを期待しています。



(1) 学校実践Ⅲで学んだこと

院生 (09年度入学) 吉田 真実

学校実践Ⅲでは、第一に自分の授業力の向上を目指すこと、そして第二に学校が抱える課題に向けた組織的な取り組みに学ぶことを目標として行われました。



授業力の向上については、まず担当の先生に指導案の書き方から学びました。何回も書き直しをしたのですが、本当に熱心に指導していただきました。そのおかげで、誰が見ても分かる指導案づくりに一歩近づけました。そして指導案を丁寧に作成したことで、自分自身も授業の流れをしっかりと把握できるようになりました。授業もはじめのうちは成立させるだけで精一杯でしたが、回数を重ねていくうちに自分なりに教材を作ってみたり、生徒とのやり取りができるようになったり、少しずつ向上していけたのではないかと思います。

学校運営のあり方について学ぶことも多くありました。例えば、今回の実習中に新型インフルエンザが流行し、学級閉鎖、学年閉鎖、行事の延期・中止などさまざまな場面に遭遇したことです。すぐさま学年会議や職員会議が開かれ、実際にそこに参加させてもらい、どのような対応をしているのかを観察しました。このように緊急の特別な場面に参加できるということが教職大学院の「学校実践」の特色だと思います。

学級にも入らせていただき、授業だけでなく朝の会、終わりの会などを担任の先生と同じようにさせていただきました。たった一ヶ月でしたが、学級のみならず信頼関係を築くことができた実感しています。

学校実践Ⅲではこれまで大学院で学んできた理論を実際の現場で確かめ、深く理解することが多くあり、とても実りある実習となりました。

(2) 学校実践Ⅳの学び

院生 (08年度入学) 中本 武徳

私は、大学院で2つの目標を掲げています。1つ目は、課題である「理科におけるメタ認知能力の育成」に沿って研究し理科の専門性を高めること、2つ目は、教員としての幅広い資質能力を身につけることです。2つの目標の達成に向けて、学校実践Ⅳでは生駒市立生駒北小学校に実習に行きました。

授業実践では、児童に指示が通らなかったり、思うように児童が活動してくれなかったり、数々の困難にぶち当たりました。その都度、実習校や大学院の先生方と、なぜ授業がうまくいかなかったのか、その要因を1つ1つ考えていきました。そのように課題を解決していくと、少しずつ思うように授業を進めていけるようになりました。



研究授業では、教室にあるドッジボールは、空気が2リットルのペットボトル何本分入っているか調べる実験をしました。児童の予想は1~2本に集中し、ボールの大きさと同じ分量の空気が入っていそうだからという考えでした。実験してみると、ボールからペットボトル5本分の空気が出てきて、児童は予想を大きく覆され、「どうして」と驚いていました。理科では、自分の予想と結果を比較しながら考察することで、児童は成長していくことを感じました。

大学院生活も、修了に向かおうとしています。教師として学ぶべきことは多く、修了後も学ぶべきことが多々あると感じています。学校現場に出た後も、今の学ぶ姿勢を大切にしたいと思います。



4 研究発表会

「理論と実践の往還」の意義を体感することができた研究発表会

院生 (08 年度入学) 松本 哲

山々が紅葉しかけた 10 月 29 日、学位研究報告に向けた中間発表会を勤務校（山添村立やまぞえ小学校）で開催した。当日は、5 時間目に 5 年学級「国語科」研究授業、その後、研究発表会を行った。奈良県教育委員会 管理主事 山本成願先生、指導主事 東島智子先生をはじめ、教職大学院の先生方 4 名、現職院生 4 名が来校して下さった。

研究テーマは「要約に着目した『言語能力表と年間指導計画』に基づく実践研究—説明的な文章の読みを中心に—」である。情報を正確に受信・発信するためには、「要約」する言語能力が必要である。そこで、昨年度、理論研究・調査等を通して、言語能力表、年間指導計画を作成した。本年度は、1 年間を見通した授業実践を通して、児童の変容をとらえ、言語能力表の有効性を検証し指導の改善を図っている。

研究授業では 6 年教材「またとない天敵」を使い「分かりやすい要約文を書こう」という目標で学習した。県教委の先生方から「子どもに確かな力が育ってきている。」というご高評を賜り、学びの成長を確かめることができた。このような発表会が開催できたのも、奥坊校長をはじめ勤務校の同僚のおかげである。また、ご指導いただいている大学院の先生方、共に学ぶ院生の仲間に御礼を申し上げたい。

「自分で 400 字に要約できた！」そんな子どもの喜ぶ声を聞くとうれしくなる。子どもの成長する姿は、教師の研究を進めるエネルギーだ。さらに、発表会で明らかになった課題を解決すべく、研究を進めていきたい。



5 各種案内

(1) 高畑アカデミーサロン（講演会）& 入試説明会

小畑 久枝氏（JAL アカデミー）による、「国際線客室乗務員に学ぶ教師のためのコミュニケーション・マナー講座（パートⅠ・Ⅱ）」を、全 2 回開きます。同時に、教職大学院入試（第 2 次）説明会を開催します。いずれも参加費無料です。ご希望の方は、下記までお申し込みください。先着順で受付けます。

パートⅠ：平成 21 年 12 月 23 日（水）

パートⅡ：平成 22 年 1 月 11 日（月）

場所：奈良教育大学講義棟 101 教室

時間：12:50～13:00 受付

13:00～16:00 講演会

16:10～17:00 教職大学院入試説明会
& 個別相談会

TEL&FAX 0742-27-9354 spde@nara-edu.ac.jp

〈 教職大学院第 2 次募集案内 〉

募集人員：若干名

出願受付：H22. 1. 18（月）～1. 22（金）

試験日：H22. 2. 14（日）

(2) 個別相談会の実施

教職大学院では、個別相談を随時実施しております。

事前に、教職大学院事務室までお申し込みください。

TEL&FAX 0742-27-9354 spde@nara-edu.ac.jp

☆あともがき この秋は新型インフルエンザが流行し、学校現場では学級閉鎖、学校閉鎖、行事の延期・中止等で大変苦慮されたことと思います。本学の院生を受け入れて頂いた連携協力校におかれましては、院生への対応にはとりわけ細やかな配慮を頂きました。そんな中で院生たちは「予期せぬ事態の発生や緊急対応を要する場面からは、実に多くの学びがあった」との感想を寄せています。今後とも変わらぬご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひします。（文責 小谷）